派　遣　報　告　書（報告者：佐田明美　）

大会名	令和６年度第２回全九州総合バスケットボール選手権大会
開催地	長崎県立総合体育館
日　時	令和６年１１月１６日（土）・１７日（日）
担当ｹﾞｰﾑ１	女子１回戦　鹿屋体育大学（鹿児島県１位）　vs 県立石川高等学校（沖縄県２位）
クルー	CC：佐田明美　U1：藤田則正（長崎県Ｂ級）　U2：佐藤淳（佐賀県Ｂ級）

（担当ゲーム１）Pre-Game Conference

・リーガルかイリーガルかを判断し、プライマリーとしての判定を意識する。
・大学生と高校生の対戦。フィジカル面では高校生にとってはきつい。
・高校生のチームに留学生がいる。日本人と外国籍のマッチアップとなるので、どちらが仕掛けたのかを長く見ておく。
・インテグリティについて、過敏になる必要はないが、何かあったときは対応できる心づもりをしておく。

（担当ゲーム１）Post-Game Conference

・最後のフリースローの際、バイオレーション が起こったが動いてしまったクロックの修正ができた。
・アングルはあるが、無理して逆サイドから吹かなくても良いケースがあった。プライマリーとして一番近くで見ているクルーを信頼する。
・シューターに対する DF 側の TF を吹いたが、そのチームのコーチの説明が足りなかった。メカ的にはオポジットだが、今回のケースでいえば、不利になった（ファウルを吹かれた）チームに対し、コーリングレフリーがベンチサイドで状況説明したほうが良かった。

担当ｹﾞｰﾑ２	女子２回戦　日本経済大学（福岡県１位）　vs　ひらまつ病院（佐賀県１位）
クルー	CC：佐田明美　U1：林剛太（熊本県Ａ級）　U2：松浦由依（宮崎県Ｂ級）

（担当ゲーム２）Pre-Game Conference

・大学生と社会人のゲーム。２試合目なので、社会人としては体力的な厳しさはあるが、プレイの巧みさはもっている。
・外国籍のマッチアップについては、リードローテーションを積極的に。

（担当ゲーム２）Post-Game Conference

・リバウンドの競り合いで、外国籍の選手に対する手の使い方をクルーとしてシンプルにコールしてよい場面があった。
・プライマリーがペイシェントしているケースで、セカンダリーの笛が鳴ることがあった。もっとプレイを長くとらえて、笛を鳴らすタイミングを遅らせる。
・ローテーションのタイミングを迷い、遅れたことがあった。ボールがトップやミッドレーンから少し外れたエリアにある場面で、ピンチザペイントの時間が長く、ルーズザペイントの時間が短かった。プレイの展開を予測し、リードとしてヘルプディフェンダーを見ることができるポジションを取ることも必要だったかもしれない。

＊マニュアルではクローズダウン。
リードが把握すべきヘルプ DF が視野の外になる。

＊ペイントをルーズにすることによって、リードが把握するべきヘルプ DF を確認することができる。

担当ｹﾞｰﾑ３	女子決勝　日本経済大学（福岡県１位）　　vs　　精華女子高等学校（福岡県２位）
クルー	CC: 甲木善徳（福岡県Ａ級）　U1: 佐田明美　U2: 峰聰（長崎県Ａ級）

（担当ゲーム３）Pre-Game Conference

・高校生と大学生の対戦だが、フィジカル的には高校生も十分戦えるチーム。
・福岡県予選でも対戦している。そのときは30点差くらいついた。
・互いに外国籍の選手がいる。相手チームの背が低い選手が守る際のシリンダーについては、注意してみておいた方がよい。
・両チームともインカレ、ウインターカップが控えているので、ケガをさせないように。
・スムーズなゲーム運営を心掛ける。

（担当ゲーム３）Post-Game Conference　（IR: 山中萌衣（鹿児島県Ａ級・２級IR））

・全体的にクルーが見るべきものを吹いていた。
・トレイルプライマリーであったが、トレイルのアングルが悪く判定できなかったものをアングルが取れていたリードから判定できており、クルーとして助かった。
・24秒バイオレーション成立場面での笛を鳴らすタイミング。ルールとしてはバイオレーションが成立して笛を鳴らしたので、正解だったが、プレイヤーや見ている人に取っては、「遅い」と感じていたようだった。審判としては正解であっても、笛を鳴らすタイミングを考えても良かったのではないか。

今大会に参加しての感想など

この九州総合選手権は、各県の予選を勝ち抜いたU18と一般のカテゴリーのチームが出場する大会となっているので、各県の各カテゴリーのトップのチーム同士が対戦することがある。

担当したゲームでも高校生と大学生、大学生と社会人チームが対戦しており、互いのプレイスタイルやフィジカルに差がある中での判定の難しさを感じた。

また、長崎県では高校の地区新人戦の日程と重なっており、地元審判の数が少ない中で、TOとの兼務や映像担当など、一人何役も担ってくれており、頭の下がる思いであった。

TOは中学生が担当してくれたが、マスターズの大会等で研修を積んでおり、声を出しての得点確認、スコアの記入、タイマーのカウントダウン、ショットクロックの操作、交代のタイミングなど、全く問題なく、スムーズなゲーム運営ができた。

レアケースではあるが、実際のゲームでは、スコアシートに印字されている番号に同じ番号が並んでいたり、登録されていない選手が出場したりと、審判サイドが判断するのではなく、競技本部に確認してもらう案件もゲーム前やゲーム中に起こっている。登録については、チームの責任の部分が大きいが、「審判が判断することはせず、競技本部に判断を仰ぐ」との伝達があった。

毎回、大会に参加させていただく度に感じることであるが、チームはその試合に向けて、練習やスカウティングなど入念な準備をしている。だからこそ、審判も日々のトレーニングや試合の振り返りをしながら、担当するゲームにおいて、公正でスムーズなゲーム運営ができるように研鑽を積まなくてはならない。また、県外に出て、審判をさせていただいているのだから、他県の上級のゲームを見たり、話を聞いたりして、自分の審判技術向上に活かせるよう、プラスにしていきたいし、その経験を県内に還元していきたいと思う。

今回、この大会に派遣していただいた大分県バスケットボール協会と審判委員会の皆様、大会運営にかかわっていただいた長崎県バスケットボール協会、審判委員会に皆様に感謝申し上げ、報告といたします。